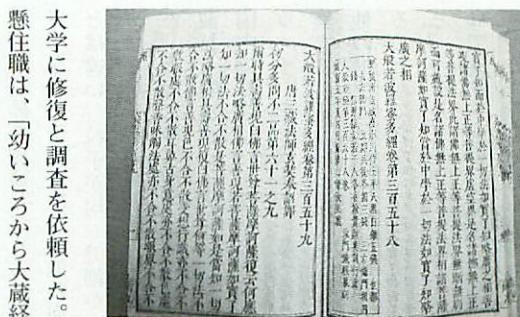


# 志賀町の古寺に眠る大蔵経能登半島地震を機に初調査



地震で破損した輪蔵（左）と経蔵

黄檗版大蔵經は江戸時代初期、黄檗宗の僧たつ鐵眼が中国から渡来した「万葉版大蔵經」をもとに作つたとされ、宗派を問わず各地の有力な寺院に広まつた。常徳寺では、真宗大谷派の高僧で15代住職も務めた得住が黄檗版大蔵經を収集。275個の箱に収められた大蔵經は、本堂のそばにある経蔵内の「輪蔵」（大蔵經を収納する棚）に保管されていたが、昨年3月の能登半島地震で中身が散乱したため、現在（20代）の藤懸了世住職が知己の仏教研究者を通じ、



常徳寺に保管されていた黄檗版大蔵經

大学に修復と調査を依頼した。藤懸住職は、「幼いころから大蔵經の存在は聞かれていたが、具体的に中身がどのようなもので、どれほど価値があるものかが分からなかつた」と振り返る。

## 学生が手作業で修復門徒向けの説明会も開く

8月に行われた調査で経典の修復作業にあたる学生

森教授らは昨年5月に常徳寺を訪れ、経蔵内の様子を確認。8月2日から3日間、日本史と民俗学専攻の准教授2人、学生16人とともに散乱した大蔵經の整理と修復にあつた。本堂では、白い手袋をはめた学生たちが真剣な表情でのりづけやホコリ払いなどの作業



調査の成果を語る森教授

冊にも及ぶ江戸時代の經典「黄檗版大蔵經」の調査が行われた。能登半島地震で境内にある經蔵の一部が壊れたのを機に、文学部の森雅秀教授らが確認した。地元関係者は今後の進展に期待を寄せている。

## 「大学は本当に頼もしい」今後の継続調査にも期待

藤懸住職は「学生さんたちの修復作業はありがたかったし、（大蔵經の）丁寧な扱いをとてもうれしく感じた。先生からは保管方法や中身について聞くことができて安心した。大学のような存在は本当に頼もしい」と胸をなで下ろし、「これからも研究を目的とした学生さんの来訪には快く応じたい」と話す。森教授によると、大蔵經以外の資料の分析は今後も継続的に進めていくといい、新たな史実の発見や、常徳寺と大学のさらなる交流に期待が集まっている。



学生からの来訪を喜ぶ藤懸住職